

イスラーム教徒の聖典観

— 現代の若者たちにとっての「クルアーン（コーラン）」⁽¹⁾ —

大川 玲子

要 約

本稿ではインターネット上のイスラーム系ウェブサイトで行われているファトワー問答を資料として、現代の若者ムスリムがクルアーンをどのように認識し、実際に関わっているのか、つまりその聖典観を明らかにすることを試みた。インターネットには世界中からアクセスがなされるため、多様な出自の者たちの状況がうかがえるが、そこで共通して見られるのは理想と現実の乖離である。ファトワーを求める者たちは、クルアーンをアラビア語で正確に読み、理解し、礼節をもって扱いたいと望んでいるが、現実にはそれは難しいため、困惑し質問する。アラビア語を母語としていない、クルアーンをぞんざいに扱うかもしれない異教徒と接する、気楽な状態でクルアーン読誦を聞きたいなど、さまざまな環境にいる者が存在するためである。彼/彼女たちはこういった乖離の状態のなかで、ムスリムとしてのあるべき正しい姿を模索しているわけだが、その背景にはクルアーンを読誦することで神からの罰ではなく報酬を得ることを願う意識が見られるのである。

1. はじめに

イスラーム教徒（以下「ムスリム」）に関するイメージはどういうものかと問えば、「原理主義者」「テロリスト」という言葉が返ってくることが多いだろう。そしてこの単純なイメージの詳細は、「唯一絶対の神を狂信的に信じ、コーランに書かれている通りにジハード⁽²⁾や自爆テロをする人たち」というものだと考えられる。実際、映画「シリアナ」⁽³⁾では、後に「自爆テロリスト」となる湾岸産油国に出稼ぎにやって来たパキスタン出身の若者が、神学校でコーラン（以下「クルアーン」）を学んでいるシーンが見られる。ここにはムスリムを虐げる敵（アメリカが想定されている）について熱く語る宗教指導者の声がかぶせられ、続いてクルアーンの教えこそが現代社会の問題を解決すると示唆されている。この映画では、それほどイスラームについて知識を持たないが、現状への

不満を抱える若者がクルアーンを学び、そして武力闘争のための技術を習得することで、「テロリスト」になるという過程が描かれている。これが「ムスリム・テロリスト」に関する、一般的なイメージに近いものだろう⁽⁴⁾。するとクルアーンとは、現代の若者ムスリムたちにとって「テロリズム」（通俗的な意味での「ジハード」）を鼓舞するための聖典なのだろうか？

実際のところ、このようなクルアーンの用いられ方は極めて例外的なものである。これから見ていくように、敬虔なムスリムたちは日々この聖典に向きあい、心の支えにしようとしている。だが彼らが皆、その扱い方や理解において十分な確信を持って接しているわけではない。当然ながらムスリム個人によって、クルアーンのとらえ方、扱い方は異なっている。例えばクルアーンの文句が書かれた紙が不要になった場合の対応に大きな差が見られる。そのリサイクルを認める見解もあれば [大川 2004 : 5]、それをリサイクルした紙

である可能性があるとして紙袋の使用を禁じたターリバーンのような存在もいるのである [クック 2005: 80-81]。また内容に関しても、その理解度・習熟度には個人差が大きいことは言うまでもない。

このような現状をふまえ本稿では、ムスリムにとって聖典クルアーンはどのような存在なのか、彼らはどのように聖典と接しているのかという問いを設定し、これに対する答えを提示することを試みたい。特に、現代的な特徴を持つムスリムに焦点を当てて考える。そのために、ムスリム国だけではなく欧米在住者も含む若者⁽⁵⁾ ムスリムたちの聖典観つまり聖典認識の分析を行い、ある意味で最も新しいタイプのムスリムがどのように伝統的な価値観、さらにそのなかでも究極的に「聖なるもの」であるクルアーンに取り組もうとしているのかを明らかにしたい。

次に資料に関して述べたい。本稿ではイスラーム系のウェブサイト上で繰り返されている「ファトワー fatwā (法学裁定)」資料を用いる。ムスリムが日常生活において疑問が生じた際に、法学者に質問し、その回答(ファトワー)を得るという行為が恒常的になされる⁽⁶⁾。「ファトワー」はクルアーンやスンナ(sunna 預言者ムハンマドの慣行)という法源から法規定を導き出す知的努力(イジュティハード ijtihad)の1つである。強制的執行力のない単なるアドバイスであり、この点が裁判官の出す判決とは異なる。したがってファトワーを出す法学者(「ムフティー mufti」)によって見解が異なる場合があるが、これは自然なこととされる。人々は法学者の権威に基づいてそのファトワーを求めるのである。ファトワーは口頭でなされる場合や書類となる場合の他、新聞紙上やさらに昨今はウェブサイト上において公開でなされる場合もある。

この問答が行われ、過去のものも閲覧可能な英語のウェブサイトとしては、イスラーム・オンライン Islam Online とイスラーム Q & A Islam Q & A が広く知られ、ムスリムの若者に人気がある。後述するように、ムスリム国のみならず欧米在住者のアクセスも極めて多い。よって本稿では、この2つのウェブサイトに見られるファトワー

資料を分析し、そこから現代の若者ムスリムたちの聖典認識を明らかにしていきたい。

昨今のムスリムの聖典観を扱った論考としては Taji-Farouki (ed.) 2004 があるが、知識人の聖典観を論じているため、一般の人々は対象となっていない。資料の問題もあり、一般の人々の聖典観を解明することは簡単ではない。だが本稿でインターネット上のファトワー問答資料を用いることで、今を生きる多様な出自を持つムスリムたちのクルアーン認識の一端を明らかにすることができると考えている。

2. 2つのイスラーム系ウェブサイトとファトワー(法学裁定)

— イスラーム・オンラインとイスラーム Q & A —

1) ウェブサイトにおけるファトワーの位置づけ

イスラームをテーマとするウェブサイトはそれこそ無数に存在する。昨今の報道で頻繁に言及されるのは、「過激派」による「テロ」声明がウェブサイトで発表されたというものであることが多い。しかし当然ながら、全世界に居住する大多数のムスリムたちはこのような「過激」なウェブサイトばかりを閲覧しているわけではなく⁽⁷⁾、彼らはそれぞれの嗜好に応じたサイトにアクセスしている。そのなかでもインターネットの特性を十二分に利用しているのが、ファトワー(法学裁定)を出すウェブサイトである。

本稿では2つのイスラーム系ウェブサイト、イスラーム・オンライン(以下「IO」)⁽⁸⁾とイスラーム Q & A(以下「IQA」)⁽⁹⁾を取りあげる。この2つは現在最も人気があり影響力を持つファトワー提供サイトである [Bunt 2003: 138, 147]⁽¹⁰⁾。

IQA は1997年にサウジアラビアの宗教知識人であるムナッジド Muḥammad Ṣāliḥ al-Munajjid が創設、2002年より登録地がサウジアラビアのアル=コバルとなり、現在フロリダの会社に管理されている [Bunt 2003: 138]。その目的に関してはウェブサイト上で次のように述べられている。「本サイトが目指すのは、ムスリムで

あれ非ムスリムであれ全ての人からのイスラームに関する質問に対して知的で権威ある回答を提供し、一般的または個人的な社会問題の解決を助けることである」。よって質問の範囲は神学からビジネス、さらには個人的問題の何でもよいとされている。そしてその回答つまりファトワーは、ムナッジドによって「クルアーンやスンナに基づく権威ある学者の典拠や他の信頼できる現代の学者の見解のみ」を用いてなされるという⁽¹¹⁾。

IO も IQA と同じころ 1996 年に開設され、登録地はカタールのドーハとなっている。興味深いことにこのサイトを支援しているのは、昨今アラブ世界以外でも名が知られるようになったジャジーラ・テレビ⁽¹²⁾を援助しているカタールの王族である [Wakin 2002]。このサイトの中心的人物であるエジプト出身の宗教知識人カラダーウィー al-Qaradāwī (1926-) は、そもそもジャジーラ・テレビに出演することで全世界のムスリムたちの間で著名になった人物であり、IO とジャジーラという 2 つのメディアは近い立場にあると言える。またこのサイトには、カイロを拠点として 100 人ほどのスタッフがあり、そのなかにはカラダーウィーと同じく、カイロにある高い権威を持つ宗教高等教育機関であるアズハル大学を卒業した者たちが含まれている [Wakin 2002]。

ウェブサイトの趣旨に関しては次のように説明されている⁽¹³⁾。「このサイトで我々はイスラームとその文明、宇宙とその変化、現代的問題とその分析に関する全ての情報や 21 世紀において不可欠な一般的情報とサービスを提供」する。そして、カラダーウィーを長とする委員会をつくり、すでにあるシャリーア shari'a [イスラーム法] を決して傷つけないことを保証、信頼を得ることを目指し、その目的は「統一された活気あるイスラームを提示すること」であるが、非ムスリムにも開かれる、というものである。以上より IO が、権威ある伝統に立脚しつつも現実的な姿勢を取ろうとしていることがうかがえる。これが IO の人気の大きな要因であろう。

次にウェブサイト内でのファトワーの位置づけであるが、これはそれぞれの趣旨に沿って異なる

ものとなっている。IQA はそのウェブサイト名からも分かるように、基本的にファトワーの問答に特化されている。問答以外は、このサイトの主催者でありムフティーであるムナッジドの著作のアーカイブがあるだけである。

他方 IO では、ファトワーを出すコーナーは重要ではあるが一部にすぎない。それ以外の内容はさまざまで、最新ニュースや時事問題のレポート、生活情報、イスラームに関する学びの場、イスラーム法に関するページ（「シャリーア・コーナー」）などが主要なコンテンツである⁽¹⁴⁾。本稿で扱うファトワーの問答は、「シャリーア・コーナー」のなかにある「ファトワー銀行（ファトワー・バンク）」に収められており、検索機能を用いてテーマごとに引き出すことができる。

ではさらに、ムフティーに焦点を当て、それぞれのウェブサイトの特徴を検討してみたい。IQA は「このサイトにおける全ての質問と回答は、本サイトの主催者であるムハンマド・サーリフ・アル＝ムナッジドによって、準備・認定・改定・編集・訂正・注釈がなされている」⁽¹⁵⁾としているように、1961 年にサウジアラビアに生まれた著名な学者であるムナッジドを中心に成り立っている。彼はダーランの大学で学んだが、何よりも重要なのは 50 年に渡ってイブン・バズ Ibn Bāz（ビン・バズとも、1912-99）の弟子であったということであろう⁽¹⁶⁾。イブン・バズはサウジアラビアの大ムフティーまで務めた人物で、サウード王家と密接な関係を持った。「ワッハーブの教皇」と喩えられるほど [バスブース 2004: 143]、この国の国是であるワッハーブ派の総帥として国の政策に大きな影響を与えた。その思想は極めて保守的で、ユダヤ教徒やキリスト教徒への憎悪、女性蔑視などを隠そうとしなかった [バスブース 2004: 143-61]⁽¹⁷⁾。IQA に質問を投稿する者たちは、イブン・バズの弟子ムナッジドによるファトワー（場合によってはイブン・バズの残したファトワーそのもの）が回答として与えられることを期待しているわけであり、この師弟の価値観に共感を抱いているということになるだろう。

IO のファトワーと比較すると、概して IQA の

方がハディース hadīth（ムハンマドの言行伝承、スンナの記録）の引用頻度が多い。これはつまり、IQA のファトワーでは個人見解よりも伝承をその判断根拠として重視する姿勢が強く見られるということである。この傾向はサウジアラビアの宗教的背景、つまり復古主義であるワッハーブ派を国家理念としていることによって生じた独自の学問風土と関係すると考えられるだろう⁽¹⁸⁾。

他方 IO のファトワーには個人見解が出されやすい傾向が見られる。カラダーウィーという人物は、「過激なイスラーム急進主義と反イスラーム主義の中道」にいて、ムスリム同胞団員でありながら正統なウラマー〔‘ulamā’, 宗教知識人〕であり、「非常に大胆な発想と緻密な論証を合わせ

持った独自の考え方」を持つ人物である〔小杉 2006 : 301〕。このように彼は、前述した IO の特徴である、伝統に立脚した現実性を体現した存在だと言えるだろう。

そしてさらに、IO にはムフティーとして数多くの人物やグループが参加し（180 の名が挙げられている⁽¹⁹⁾）、そのなかには欧米で世俗的な教育を受けている者たちが多く見られる（表 1 参照）。よってムフティーは宗教者だけではなく、完全に世俗的なキャリアの人や非ムスリム国でのキャリアを持つ人が含まれている。しかも興味深いことに、IQA の主宰者であるムナジドのファトワーもここに含まれることがあり、IO のムフティーの多様性がうかがえる。このように IO はカラダー

表 1 IO の主要ムフティー

	名前・名称	経歴など
①	ユースフ・カラダーウィー	1926 年エジプト生まれ。1973 年アズハル大学で博士号。ワクフ省やアズハルで勤務後、カタール大学のシャリーア・イスラーム学部学部長、ヨーロッパ・ファトワー調査協議会会長、国際ムスリム学者協会会長を務める。 〔ムスリム同胞団思想家。大学卒業前から同胞団に加盟し、数回投獄されている。1980 年代以降ムスリム同胞団の中道派を代表する思想家として、アラブ諸国だけでなく世界中のムスリムに大きな影響力を持つ。〕
②	ムザミル・スイッディーキー	北米フィクフ〔イスラーム法学〕評議会議長。インド生まれ。マディーナ（メディーナ）・イスラーム大学卒、バーミンガム大学で修士号（神学）、ハーバード大学で博士号（比較宗教学）。スイス、英、米の多くのイスラーム組織でも勤務。
③	サノ・クトゥブ・ムスタファー	ギニア生まれ。国際ムスリム学者協会会員、アメリカ・ムスリム法学者議会議員。キング・サウード大学（サウジアラビア）で修士号（比較法学）。国際イスラーム大学（マレーシア）で博士号（法学）。
④	アフマド・クッティー	インド生まれ、カナダ国籍。トロントのイスラーム学院上級講師。マディーナ・イスラーム大学、トロント大学で修士号（イスラーム学）、マクギル大学博士課程（シャリーア）。
⑤	アブドゥル・ファッターフ・アシュール	アズハル大学教授（クルアーン解釈学とクルアーン学）。シャリーアをアズハル大学やアラブ首長国連邦、クウェートで教える。
⑥	ムハンマド・サレフ・アル＝ムナジド	サウジアラビアの著名な講師・著述家。 〔1961 年生まれ。ダーラン（サウジアラビア）の大学で学ぶ。50 年に渡ってイブン・バズの弟子。〕
⑦	モンザル・カハフ	エコノミスト兼カウンセラー。ダマスカス大学（シリア）で学士（ビジネス）。ユタ大学で博士号（経済学）。ニューヨークでファイナンシャル・コンサルタントとして勤務。
⑧	アティヤ・サクル	アズハル・ファトワー委員会の前委員長。
⑨	ヨーロッパ・ファトワー調査協議会	1997 年創設。ダブリン拠点の私的機関。カラダーウィーが会長。
⑩	エジプト・ファトワー委員会	1895 年創設の公的機関。エジプト社会を中心に世界中の現代的問題に対してファトワーを下す。

（出所） http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?cid=1118742803189&pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar%2FCollection%2FFatwaCounselorsE

ウィーを中心に幅広い立場のムフティーを擁した間口の広いウェブサイトとなっている。(ちなみに本稿の中心的テーマであるクルアーンに関しては、カラダーウィーによるファトワーは表8の「⑥その他」に1件のみしか見られない。)

しかもこの多様性は同時に並存している。IOでは1つの質問に対して、複数のファトワーが併記されることが頻繁に見られる。これはまさにイスラーム法学のあり方をよく表していると言える。前にも少しふれたが、ファトワーとは決して絶対的な回答ではなく、ある法学者が学問的努力によって回答を導き出そうとした試みの結果にすぎない。言うまでもなく絶対的な答えはアッラーのみが知ることであり、人間の営みは全て相対的なものとされる。ファトワーに従うかどうかは、ムフティーの権威や信頼と質問者の納得の問題ということになる。

このような発想に基づけばIOに見られるファトワーの複数併記は、ウェブサイトの読者に対してある1人の人物のファトワーに思考を限定せず、多様な見解があり得ることを示しつつ、自らの思考の契機としてウェブサイトを見るようながす効果もあるのではないかと考えられる。また同時に、複数のファトワーが併記され、1つのファトワーの絶対性が低下するために、個人見解を強く打ち出した場合のリスクも少なくなるとも考えられる。いくつもの個人見解が示されたならば、読者の判断がそれだけに縛られる可能性も少なくなるであろう。このようにIOのファトワーではIQAと比べると伝承(ハディース)の引用の頻度は少なく、個人見解が明確に出されることが多いのである。

2) 質問内容の傾向とアクセス分析

ここではファトワーを求める側(ムスタフティー mustafti)に焦点を当ててみたい。まず、どのような問題に対してファトワーが必要とされているのであろうか。実際にムフティーと対面してファトワーを求めるという本来的な状況での質問に関しては、1997年6月にエジプトで記録されたものがある(表2)。

これらのほとんどが家族などの人間関係の問題である。人々が判断に迷い答えを法学者に求める場合、それは極めて身近なケースが多いことが分かる。信仰の内面に関する問題は少なく、恐らく「⑬思想関係」の2件程度であろう。

他方、IO(表3)やIQA(表4)では身近な問題に留まらず、多岐にわたる問題に対してファトワーが求められている。

確かに家族などの人間関係の問題がこれらのサイトにおいても大きな割合を占めている。だがそれ以外の問題の多様さが顕著である。日常生活においてムスリムとしてどのようにふるまうかという問題に加え、信仰内容や学問的知識、現実の理念的問題といった内面的・思想的な質問が極めて多く見られるのである。この違いは何に由来するのであろうか? ウェブ上で質問するという行為が、ムフティーと実際に対面する場合と異なる状況を生んでいることは想像に難くない。文字情報のみのやりとりであるゆえに、内面的な事柄を話

表2 実際のファトワー問答

	内 容	件 数	%
①	離婚関係	38	42
②	遺産相続	10	11
③	信仰行為	10	11
④	イスラームへの入信	5	—
⑤	家族関係	4	—
⑥	財産関係	4	—
⑦	貸借関係	3	—
⑧	ズィナー(姦通)	3	—
⑨	贈与	2	—
⑩	社会関係	2	—
⑪	乳母・乳兄弟問題	2	—
⑫	婚約	2	—
⑬	思想関係	2	—
⑭	ジン(幽精)の存在	2	—
⑮	慣習による婚姻	1	—
	総 計	90	

(出所) 小杉2002:33より作成

表3 IOの内容構成

	内 容	件数	%
①	儀礼	1102	27.8
②	道徳と作法	628	15.9
③	家族	595	15.0
④	ムスリムの信条	411	10.4
⑤	国際関係とジハード	277	7.0
⑥	財政の問題	246	6.2
⑦	健康と科学	120	3.0
⑧	罪と罰	95	2.3
⑨	ダアワ〔宣教〕の原則	93	2.3
⑩	クルアーンとハディース	83	2.1
⑪	シャリーアに基づくシステム	60	1.5
⑫	ズィクル〔神名を唱えること〕と祈願	59	1.5
⑬	イスラーム法学の原則	53	1.3
⑭	芸術と娯楽	52	1.3
⑮	イデオロギー、運動、宗教	42	1.0
⑯	スポーツとゲーム	31	0.7
⑰	観光	4	0.1
	合 計	3951	(100)

(出所) <http://www.islamonline.net/completesearch/english/CounsellorSearch.asp?hID=0> (2006年9月13日)

表4 IQAの内容構成

	内 容	件数	%
①	イスラーム法学の原則	4598	56.0
②	礼儀、道徳、心を穏やかにするもの	968	12.0
③	家族に関するイスラーム法学	814	10.0
④	基本信条	802	10.0
⑤	知識と宣教	372	4.5
⑥	心理的・社会的問題	151	1.8
⑦	イスラームの歴史と伝記	137	1.6
⑧	クルアーンとその学問	135	1.6
⑨	ハディースとその学問	110	1.3
⑩	教育としつけ	71	0.9
⑪	イスラーム的政治	27	0.3
	合 計	8185	100.0

(出所) <http://www.islam-qa.com/index.php?pg=tree&ln=eng> (2006年9月13日)

題にしやすいということもあるだろう。さらに質問する者たちの周囲の環境がこれらの内容の相違に影響しているとも考えられる。よって次にこれらのウェブサイトへ質問する者たちの特徴を見ていきたい。

IQAでは質問者たちが投稿した国(出身国ではなく居住国である)が明記されておらず、質問内容のなかからうかがうしかない。だがIOでは多くの質問に投稿国が明記されているため、ここではIOのアクセス状況のみを見ていくことにする。

「③家族」と「⑤国際関係とジハード」という身近な問題と国際問題といった対照的ではあるが極めて重要な事柄に関するファトワーについて、どの国から投稿されているのかを表5と表6に示した。どちらにおいても明らかにアメリカ、イギリス、カナダといった英語が用いられている欧米国が上位に入っている。

表6を表5と比較すると、上位3位内にエジプトが入り、第4位がパレスチナ(表5では投稿数が3つしかなかった)となっている点が目に付く。この相違の原因として考えられるのは、やはり投稿者を取り巻く環境の違いから生じる問題意識のあり方であろう。「国際関係とジハード」はパレスチナ問題とイラク問題が中心的となっており、これらへの関心は特に中東アラブ諸国で強く示されていると推測される。また中東在住者は、「家族」に関して言えば、欧米在住者に比べると周囲との摩擦も少なく、疑問が生じても周囲に聞くことができるため、質問も少なくなっているのかもしれない。だが、「国際関係とジハード」に関しては周囲には尋ねにくいいため、匿名性の高いウェブサイトへ質問しているのではないかと考えられる⁽²⁰⁾。

さらに次章で扱うように、本稿の焦点はクルアーンに関する問答である。「⑩クルアーンとハディース」にある83件のうち64件がクルアーンに関連し、残りの19件がハディースに関するものである。この64件を見ると表7のような投稿国の構成となっている。

ここでは、順位は異なるが表5の「家族」のカ

表5 IO「③家族」の投稿国と件数

①アメリカ	73	マレーシア	6	クウェート	3	イラク	2
②イギリス	52	フランス	6	パレスチナ	3	スーダン	2
③カナダ	40	ドイツ	5	シンガポール	3	イエメン	2
④エジプト	29	ヨルダン	4	オランダ	3	アルバニア	2
⑤パキスタン	24	モロッコ	4	ニュージーランド	3	ウクライナ	2
⑥インド	20	オーストラリア	4	レバノン	2	デンマーク	2
バングラデシュ	8	ベルギー	4	ナイジェリア	2	南アフリカ	2
アイルランド	7	イタリア	4	ケニア	2	アングイラ	2
アラブ首長国連邦	6	チュニジア	3	日本	2	アラスカ	2
サウジアラビア	6	インドネシア	3	アフガニスタン	2	オーストリア	2
スイス	2	モーリシャス	1	ルーマニア	1	中国	1
スウェーデン	2	アルゼンチン	1	ポーランド	1	ハンガリー	1
イラン	1	アンドラ	1	ソマリア	1	香港	1
ウズベキスタン	1	ウルグアイ	1	アイスランド	1	アルメニア	1
カザフスタン	1	タイ	1	ベラルーシ	1	不 明	206
マラウィー	1	ヴェトナム	1	ジブチ	1	総 計	595
マダガスカル	1	ヴェネズエラ	1	ガイアナ	1		
モルドバ	1	フィリピン	1	ガーナ	1		

(注) 2006年9月13日作成

表6 IO「⑤国際関係とジハード」の投稿国と件数

①アメリカ	35	サウジアラビア	3	スーダン	1	スウェーデン	1
②エジプト*	24	シリア	3	エチオピア	1	ボスニア・ヘルツェゴビナ	1
③イギリス	15	アンゴラ	3	チュニジア	1	ベルギー	1
③カナダ*	15	モロッコ	2	ウズベキスタン	1	ヴァージン諸島	1
④パレスチナ	9	オマーン	2	バングラデシュ	1	アゼルバイジャン	1
⑤アラブ首長国連邦	7	ナイジェリア	2	イエメン	1	オーストリア	1
⑤インド	7	パキスタン	2	ルーマニア	1	オーストラリア	1
マレーシア	4	クウェート	2	日本	1	バブア・ニューギニア	1
ヨルダン	4	エリトリア	2	フランス	1	サモア(米領)	1
イラク	4	オランダ	2	イタリア	1	レバノン	1
ドイツ	4	アイスランド	2	ソマリア	1	不 明	97
アフガニスタン	3	カタール	1	ウルグアイ	1	総 計	277

* エジプト+カナダから同時に送られたものが1件ある

(注) 2006年9月13日作成

表7 IO「⑩クルアーンとハディース」よりクルアーンに関する質問の投稿国と件数

①エジプト	7	スイス	2	カメルーン	1	サウジアラビア	1
②アメリカ	6	ヨルダン	1	デンマーク	1	モルジブ	1
③カナダ	4	アンドラ	1	ドイツ	1	ルーマニア	1
④イギリス	4	エチオピア	1	パナマ	1	不明	17
⑤パキスタン	4	インド	1	フィジー	1	総計	64
エリトリア	2	スペイン	1	シエラレオネ	1		
アルバニア	2	マレーシア	1	レバノン	1		

(注) 2006年9月13日作成

テゴリーと同じ国が上位を占めており、表6「国際関係とジハード」とは異なる構成となっている。クルアーンに関する問題はムスリムにとって家族問題に近い、身近な日常生活の事柄であるためではないかと考えられる。

次に質問者の年齢に関してであるが、どちらのウェブサイトにおいても明記されていないためはっきりしたことは言えないが、質問内容のなかで言及されている場合が散見される。例えば13歳の子どもが質問をしているケースがある。「クルアーンの心臓と考えられるスーラ sūra [章] はどれですか?」との問いがなされ、それに対するファトワーで「たった13歳でこのような質問ができるという事実は、賞賛と激励に値する」とあり、年齢が判明する⁽²¹⁾。これは文脈から考えて、恐らく例外的にかなり若い者による質問なのであろう。だが他に年齢が言及されている場合はほぼ全て若者たちによる質問である⁽²²⁾。よってこれらのウェブサイトにアクセスする者たちの中心は若者であることがうかがえる。

以上のようなアクセスの状況をふまえ、ウェブ上での質問内容の多様性、特に内面的な問題の多さに関して再度考えてみたい。表2のデータのようにエジプトなどムスリム国に居住している場合とウェブ上で多く見られるように非ムスリム国に居住している場合では、その生活における問題のあり方は当然異なってくる。周囲との摩擦の生じ方が違うからである。非ムスリム国に暮らすムスリムたち、特にアイデンティティ形成の途上にある若者たちにとっては、行為の問題に加え内面の

問題に関しても判断に迷うことばかりであろう⁽²³⁾。

この日常生活における判断の迷いに関しては、ファトワーを求めるに至った契機に注目してみることでさらに明らかになると考えられる。質問する際に、その契機についてしばしば言及されているが、それは自分の問題から生じた場合だけではなく、周囲や報道メディアでの見聞に加え、人に尋ねられたり風聞を聞いたりしたことからの疑問を持つに至った場合が極めて多い。つまり質問者たちが周囲に対するリアクションとして疑問を持つ場合が少なからず見られ、これもまた、特に非ムスリム国に暮らす者たちに生じやすい問題のあり方だと言えよう。

このように、IOやIQAは、非ムスリム国に居住するという極めて現代的な環境のなかで生じるムスリムの若者の問題を強く反映したウェブサイトである。そこでは普段口にするのがためらわれるような心の内面の問題が数多く提示され、イスラームの知識人たちによる回答が示されているのである。

3. 聖典クルアーンに関する問答

1) 質問の内容：概観

表3と表4で示したように、クルアーンに関する質問は項目として独立して存在している。前述したように(表7)、IOでは「⑩クルアーンとハディース」83件のうち64件がクルアーンに関連した質問となっている。IQAでは「⑧クルアーンとその学問」の135件に加え、「②礼儀、道徳、

表 8 クルアーンに関する質問の内容

	テ ー マ	件 数			
		IO	IQA	合計	%
①	読誦をめぐって	25	51	76	37.6
②	章句の意味	7	43	50	24.7
③	モノとしての扱い方	7	21	28	13.8
④	学問的関心	9	23	22	10.9
⑤	信憑性に対する疑問	8	7	15	7.4
⑥	その他	8	3	11	5.4
	合 計	67	89	202	(100)

(注) 2006年9月13日作成

心を穏やかにするもの」の968件のなかに「クルアーン読誦」の15件があるため、計150件である。よって双方合わせて214件となるはずであるが、実際には閲覧不可能なページが存在などのため、表8にある件数が対象となる。

内容はこの表8のように大きく分類できるだろう。ただし当然ながら、1つの質問のなかに複数のテーマが混在する場合があります、その時は最も重要視されていると考えられるテーマでもって分類している。

これから各テーマに関して検討していくが、その前に全体を概観し、これらのテーマ分類の理由を明らかにしておきたい。件数の最も多いテーマが「①読誦をめぐって」、それに次いで多いものが「②章句の意味」となっているが、これは「読誦されるもの」という意味である「クルアーン」という呼称の特質をよく表している。スミス W. C. Smith の言葉を引用するまでもなく⁽²⁴⁾、この聖典は読誦という儀礼行為と内容の理解という知的作業の両面によって成立している。ムスリムはこの双方に同時に取り組みながら、クルアーンに向かい合っているのであり、どちらかが欠けることはあり得ない。それがこれらのテーマに関する質問の多さに反映していると言えるだろう。

続く「③モノとしての扱い方」も日常生活のなかで読誦したり、意味を考えながら読んだりする際に、クルアーンという物をどう扱うかに配慮するなかで生じた疑問である。これも聖典に対する

姿勢としてごく自然なものであると言えよう。クルアーンはアッラーの言葉そのものであり、汚れた手で触れることはできず、極端な場合には異教徒が触れることさえ認めない立場もある〔クック 2005：70-81〕。

「④学問的関心」とは、イスラームの伝統的な学問分野であるクルアーン学（ウルーム・アル＝クルアーン 'Ulūm al-Qur'ān）と重なるもので⁽²⁵⁾、この聖典の成立や解釈、文体などが関心の対象となる。ここから現在においてもクルアーンそのものに関する従来通りの知的関心が継続されていることが見てとれる。これに対して「⑤信憑性に対する疑問」はある意味で現代的な問題設定である。聖典としての真偽に疑問を感じるの、異なる価値体系に接しているからこそであろう。

では次に各テーマに関して検討していきたい。

2) 読誦をめぐって

質問は、明らかにいくつかの関心事に集中してなされている。

(1) 読誦方法

最も多く見られるのが、実際にどのように読誦すればよいのかという問いである。特に多いのが、読誦は1人でした方がよいのかそれとも集団でしたほうがよいのかという疑問と、読誦時にどういふ具合にドゥアー（du'ā', 祈禱句）を唱えるのがよいのかという疑問である。これら2つのタイプの質問はクルアーンの実際読誦に関する規則ではなく、ある意味でその外枠にあたるものである。少なくとも者たちが、読誦を始めようとする段階で疑問にぶつかっていることがうかがえる。

他方、読誦の規則そのものに関する質問もなされている。読誦する章の順序や節回し、中断方法に関連して複数の問いが見られる。これらは前述した外枠の問題を乗り越えて、実際に読誦を行うにあたって生じる疑問である。だがその数は外枠の問題に比べると明らかに少ない。伝統的な読誦の技術論（タジュウィード tajwid）を学ぶ際にはこれらの点が重要となり、時間と手間をかけて習得されることを考えると、実際にはこの段階に至るまでに壁があるのだと考えられる。

さらに興味深いのは「ビドア (bid'a, 「革新」または「逸脱」)」と「報酬」について強い関心が寄せられている点である。「ビドア」とはイスラームに特有の概念であるが、簡単に言えばスンナにない行為のことである。多くの場合において否定的な文脈でとらえられ、それを行うにあたって慎重な態度が示されることが多い。例えば IO には、読誦後に「サダカ・アッラーフ・アル＝アズィーム ṣadaqa Allāh al-‘aẓīm [偉大なるアッラーは真実を語られた]」という祈禱句を唱えることがビドアではないかという質問が来ている⁽²⁶⁾。この習慣はきわめて一般的のものであり、ムフティーも、これをビドアとするのはイスラームを厳密にとらえずいで、イスラームはもっと柔軟なものだと述べ、ためらいなく否定している。IQA でも同様に、ビドアであることを懸念する質問が見られるが⁽²⁷⁾、これらの質問に共通するのは、自分たちの行為がムハンマドのスンナに合致した正しいものであることを望む意識である。だがそれと同時に、上述の問答に見られるような正当性に対する過剰なほどの疑問は、質問する者たちの迷いの深さを示唆しているとも考えられるだろう。

また「報酬」の概念は「(4) 効能」において検討するが、これは読誦者にはアッラーからの祝福、つまりところ天国に行くという「報酬」が与えられるという発想を背景としている。例えば IQA において、就寝直前に読誦することによる「報酬」の有無を問う者が存在する⁽²⁸⁾。この質問者は、夜にクルアーンのなかから 10 の句を唱えれば不注意な者 [いずれ地獄に落ちる者] として記録されないとするムハンマドのハディースが正しいのかどうかを問うている⁽²⁹⁾。

これに対するファトワーでは、ハディース「夜に 10 の句を読誦する者は誰でも、不注意なものとして記録されることはない」が正確に引用され、このハディースの信憑性がかなり高いことを示した上で⁽³⁰⁾、その内容の検討に入っている。それによれば「夜に」の箇所において 2 通りの解釈があり、1 つは「夜の礼拝において」、もう 1 つは「礼拝中でもそうでなくても夜において」であるという。そして両方ともあり得るとし、これらの

解釈それぞれの根拠となる伝承や学者の見解をいくつも引用して検討した後、「夜に 10 の句を読誦した者は、夜の礼拝中であれそれ以外であれ、不注意な者に含めて記録されないことが望まれるのであり、これはアッラーの恩恵が実に偉大であることによるのである」と述べている。続いて就寝前に唱えるにふさわしい句とその「効能」について言及している伝承 (例えば「玉座の句」と呼ばれる 2 章 255 節を唱えると悪魔を追い払う天使がやってくる、など) をいくつも紹介している。

こういった、伝承や学者の見解の引用を積み重ねる議論展開はイスラーム思想における典型的なものである。前述したように、特に IQA でこのようなファトワーが出される。ここではつまり就寝直前の読誦を認め、その「効能」を紹介し、質問者の懸念を払拭しているのである。

(2) 暗誦

この問題もある意味で、前述した読誦の「外枠」に相当すると言えるかもしれない。読誦の規則の詳細ではなく、クルアーンの暗記という壁にどう対処しようかと悩んでいる者たちの存在がここから見て取れる。クルアーンの暗誦はムスリムにとって賞賛される事柄であり、できればそうしたいと多くの者たちが願っているが、実際には簡単ではないのである [大川 2004 : 62-70]。

暗誦できない場合、ムスハフ muṣḥaf と呼ばれるクルアーンの書物そのものを手にして、それに目を落としながら読誦することになる。そこで「クルアーンをムスハフを見ながら読むのと、記憶から読誦するのとどちらが良いのか？」という問いが発せられ、礼拝中は暗誦すべきだが、それ以外の時はムスハフを見ながらすればよい (ただし暗誦の方が心の状態が良いならそちらでもよい)、というファトワーが返されている⁽³¹⁾。礼拝のために暗誦すべき句は短いものでよく、それほど困難ではない。よって暗誦の問題は解決されるかと思われるのだが、実はそれでも暗誦したいと願う者たちによる質問が後を絶たない。

暗誦する方法について細かい質問も出されている。ある質問者は、暗誦するために最善の方法は何か？、そのためのスケジュールを教えて欲しい、

1つのジュズウ juz' (クルアーンを30に分割したうちの1つ)を暗記した後、次に移る前に復習しなければならないのか?と、細かく尋ねている⁽³²⁾。このように、暗誦の方法を問う者は少なくなく、クルアーン全体を暗誦することが目標として設定されているのである。

さらにここでも「報酬」概念が念頭に置かれている場合がある。例えば、ハーフィズになる報酬は何なのか⁽³³⁾、私は自分の友人がクルアーンを暗記する励みになるようにと褒美をあげたが、私にも何か報酬があるのか⁽³⁴⁾といった質問がなされている。「ハーフィズ ḥāfīz」とはクルアーン全体を記憶している人物であり、社会で大変な尊敬を集める。これら2つの質問に対するファトワーでも、それぞれ天国での高い地位と報酬について述べられている。

また同時に「罪」そして「罰」の概念と結び付ける質問もある⁽³⁵⁾。質問者はアメリカに住む女性で、かつて20ジュズウを覚えていたが、忘れてしまった。すると友人に、それを覚えなおさないと地獄に落ちる、と言われた。彼女はとても忙しくこれを覚えなおす余裕がないが、本当に地獄に落ちるのでしょうか、と尋ねている。これに対する返答 (IOのライターによって書かれている) においては、主にムナジドのファトワーが引用されている。それによれば記憶したクルアーンを忘れるのは大罪であり、忘れないように継続的に読誦すべきであるという。IOによる地の文においても、忘れるのは怠慢である証拠だとされ、地獄に落ちることになると述べられている。

(3) 態度

クルアーン読誦に際しての態度に関する質問のなかには、極めて現代的な問いが多く、興味深い。ここで見られる問題の多くは、オーディオ機器が普及しクルアーン読誦を簡単に聞くことができるようになったことに起因する。例えば、カセットテープなどに録音されたクルアーンをトイレで、または車の運転中に足元のカーステレオから、または仕事をしながら聞いてよいのかといった質問がなされている⁽³⁶⁾。これらは全て他のことをしながらクルアーンを聞く状態であり、それぞれ、恥

部を隠さない浴室であること、最も低い足元からクルアーンを聞くこと、クルアーンを集中して聞くべきであるのにBGMとして扱うこと、これらに関して懸念が示されているのである。

それぞれのファトワーは次のとおりである。前2件に関しては、トイレは不浄で悪魔がいるため、そして人間の足元から聞くことはクルアーンに対して敬意を払っていないため、クルアーンを聞くことは認められないとされている。だが最後の1件に関しては、礼拝や金曜日の説教の時以外は、必ずしも集中して聞く必要はないと述べられている⁽³⁷⁾。

(4) 効能

ここではクルアーンを読誦することに対する利益、つまり「効能」について焦点をあてたい。天国に行けるという「報酬」があると考えられていることはすでに述べたとおりで、これが最大の「効能」であることは言うまでもないが、これが得られるのは来世である。他方、人は現世利益も求めるものであり、アッラーの言葉そのものであるクルアーンを唱えることで、さまざまな効果が生じると信じられている [大川 (1997) : 90-105]。あるマレーシア在住者は「クルアーンを学び記憶することへの報酬について教えてもらえますか?」と率直に尋ねている⁽³⁸⁾。これに対するファトワーはムナジドによるもので、彼は天国で高い地位を占めることや復活の日に生前の罪が軽減されることについてハディースを引用しながら説明している。

また強い関心が寄せられているのは、病の癒しに関してであろう。IOでも「クルアーンを読めば病気を治すのに役立つのでしょうか?」との質問がイギリス在住者からなされている⁽³⁹⁾。そのファトワーはエジプトのアズハル系学者によって出されている。それによれば、まず念頭におかなければならないのはアッラーのみが治癒の能力を持つということであるが、ムハンマドは病の治療のためにドゥアーを唱えたほか、「玉座の句」でもって [病を引き起こす原因となる] 邪視や魔術の呪文から身を守ったとされており、クルアーンは全ての人にとって治癒と永遠の防御となるものを豊

富に提供してくれる、という。このようにクルアーンの句の読誦による病の治癒が認められている。

天国行きと病氣治癒以外の効能としては、死者に対するものが見られる。パキスタン在住者が36章の効能について質問している。ムザミル・スィッディーキー（表1の②）とアティヤ・サクル（表1の⑧）がファトワーを出しているが、ともにこの章の効力を認め、「クルアーンの心臓」と呼ばれ、復活の日について言及されている⁽⁴⁰⁾ことから、特に亡くなった者の前で唱えることを薦めている。アティヤ・サクルはこうすることで死者の罪が許されるからだと説明している。

他方、その効能に対する期待感が過剰に強まる傾向も見られる。例えば癌を治癒するためには112章を1万回唱えればよいのかという質問もあるが、これに対するファトワーはイスラームにその根拠はないというものである⁽⁴¹⁾。

(5) アラビア語

クルアーンがアッラーの言葉そのものであると信じられているがゆえに、その翻訳に関しては敏感な反応が常につきまとう。厳密な意味での他言語への「翻訳」の存在は認められず、それらは全て「解釈」や「解説」として認識されることになる。ここでもアラビア語を母語としない者たちからの質問が見られる。

根本的な問題として、なぜアラビア語でクルアーンを読む必要があるのかという疑問が存在している。アラブ国ではないイスラーム国に居住する者から、クルアーンを読んではいるが、アラビア語を学習することは義務なのかという質問や⁽⁴²⁾、ペルシア語を母語とする者から、なぜクルアーンをアラビア語ではなく自分が理解できるペルシア語で読んではいけないのかという質問⁽⁴³⁾が寄せられている。前者の問いに対して、アフマド・クッティー（表1④）はクルアーンの言語であるアラビア語の学習の重要性を認めたとうえで、ムスリムであるためには六信五行⁽⁴⁴⁾こそが必要条件であり、アラビア語を必須とする見解は誤りだとしている。他方、後者の質問に対しては、アズハル大学の比較法学の教授が答え、クルアーンの中の1つの単語は複数の意味を含んでおり、翻訳では

それが伝えられないとして、アラビア語で読むことを勧めている。このようにクルアーンに関しては義務ではないとは言えアラビア語を用いることが強く求められているのである。

こういった背景のもとで、例えばカナダ在住のパキスタン系の人物が興味深い質問をなげかけている⁽⁴⁵⁾。彼はアラビア語が分からないが、クルアーンを理解したいと考えている。そのためには訳本を使ってアラビア語の発音を気にせずにも読むのかどうか、タジュウィードの学習と暗誦のどちらを先にすべきかと尋ね、正しいアラビア語で読誦できていないことに懸念を示している。この懸念の背後には恐らく、彼の家族による次の発言があると考えられる。彼は、アラビア語でのクルアーンの読み方を知らないと、「審判の日」に盲目の状態で復活することになるとハイデラバード出身の母や祖母に言われたのである。よって彼は、クルアーンをアラビア語で読む方法を知るとはムスリムの義務なのかと尋ねているのである。

ムフティーのクッティーはこの家族の発言に関してはその証拠を知らないと述べ、肯定していない。だが、クルアーンの翻訳には限界があることを指摘し、意味の理解に気をとられるあまりアラビア語の読誦をないがしろにしてはならないと述べている。クルアーンとはただ意味を知的に理解するためのものではなく、精神的に感応すべきものだという。そこで彼は優れた読誦者の読誦を聞きながら、良い翻訳書を用いて意味をできるだけ理解するよう努めるのが良い、と勧めている。

また翻訳に関連して「効能」に関する質問も投稿されている⁽⁴⁶⁾。IQAにおいて、36章を読誦する際に英語の翻訳などで読んでも報酬があるかどうかとの質問が示されている。ムナジドのファトワーは、アラビア語で読むほどの報酬はないが、アラブ人がタフスィール tafsīr（クルアーン解釈書）を読んだ場合と同程度の報酬は得られる、なぜならば翻訳書は解釈書であるからだ、と回答している。

アラビア語を母語とする者にとってさえクルアーンの読誦術は簡単なものではなく、学習の対象となる [大川 2004: 68]。さらにアラビア語を母語

としない者にとってその習得は至難の技であり、これらのような困惑が生じているのである。

3) 章句の意味

ムスリムがクルアーンに取り組むにあたって、読誦と意味理解がその両輪となることはすでに言及した。ここでは後者に関する問答に焦点をあてる。基本的には単純に文言の意味を問うものが多い。例えば、「洞窟の人々」の物語に登場する犬にはどういう意味があるのか、という質問がある⁽⁴⁷⁾。これは18章18節のことで、ファトワーとしてはサウジアラビアで活躍した学者シャンキーティー al-Shanqīṭī (1907/08-74) のタフスィール *Aḍwā' al-Bayān* (『説明の諸光』) からの引用が示されている。そこでは古典期の著名なクルアーン解釈者イブン・カスィール Ibn Kathīr (1300頃-73) の解釈や他のクルアーンの句を引用し、犬の存在によって正しい人との交際が重要であることが示されているという解釈が提示されている。

このような伝統的な問答以外に、時事的な問題を背景とした質問も多少存在する。例えばユダヤ教徒に関して、彼らがその罪ゆえに祖国を持たず世界をさまよっていると、キリスト教徒の新約聖書やクルアーンに書かれていると聞いたが、それはクルアーンのどこの箇所なのか？と、ディアスポラにまつわる質問が寄せられている⁽⁴⁸⁾。アズハル大学のイスラーム学・比較宗教学の教授によるファトワーは、ディアスポラを意味する章句がクルアーンや新約聖書のみならず、トーラーにもあると述べている。そして現実問題への言及に踏み込み、多くのユダヤ教徒がイスラエルはトーラーに反しているとその存在を否定しているのであり、1948年のイスラエル建国を支持したのはシオニズムにすぎないと述べている。さらに彼は、それ以前におけるムスリムとユダヤ教徒の共存関係について、ムスリムの寛容な受け入れを強調しながら叙述し、「我々は彼らを1つの宗教共同体として受け入れなければならない。そして全てのアッラーの預言者〔モーセやイエスなど〕と先に啓示された書物〔旧約・新約聖書〕を信じなければならない」としている。このようにディアスポラを話題の契機

として、ファトワーのなかではイスラエル建国以前の状態が肯定されている。

さらに米国在住者が、5章60-64節でユダヤ人が神に呪われ猿や豚に変えられたと述べられ、これは反セム主義的に聞こえるが、どういうことなのか？という問いを投げかけている（掲載は2004年7月13日）⁽⁴⁹⁾。ムザッミル・スィッディーキーのファトワーは、クルアーンは反セム主義であるどころかユダヤ人を「啓典の民」として高く評価しているとした上で、彼らのなかの一部がクルアーンによって非難の対象となっているという解釈を提示している。その一部とは、彼らへの啓示を歪曲した者たちやムハンマドを嘲笑した者たちであるという。

また米国在住者からいわゆる「911」とクルアーンの章句を結び付ける質問がなされている（掲載は2003年9月10日）⁽⁵⁰⁾。彼は最近、クルアーンの奇跡について書かれたチラシを受け取ったが、その内容はワールド・トレード・センターの悲劇がクルアーンで描写されているというものであった。これによれば、クルアーンの9章109節「アッラーへの義務とその満足に基づいて建物の基礎を築く者が良いか、それとも突き出て崩れそうな崖の際に建物の基礎を築き、一緒に地獄の業火に転げ落ちる者か。アッラーは不義を行う者を導かない」がそうだという。しかもこの句は11番目のジュズウに含まれ、章冒頭から単語を数えると201番目となり、これらの数字は「2001年9月11日」をそれぞれ示唆している、という。この句の内容が、不信仰者の建物の崩落を描いているために、このような数字の操作を駆使した結び付けがなされ、広まったのだと考えられる。このような類の風説はしばしば庶民のなかに広まるが⁽⁵¹⁾、911に関連してアメリカのムスリムの間にも生じていたことが分かる。

さてこの問いに対するファトワーは、このようなクルアーンの句の解釈を認めないものである。IOのライターは、このようなチラシは人々をだます非科学的なものであり、クルアーンは誰でも解釈してよいものではなく、それには条件がある、と強く批判している。さらにエルサレム大学のイ

スラーム法理論学教授のファトワーが詳細を語っている。彼はこのような行為をクルアーンの言葉を用いた遊びであり、ワールド・トレード・センターの悲劇を正当化するためにクルアーンの意味を捻じ曲げていると強く批判している。(さらにこの句までの単語数は2001ではなく2083だとも述べ、この解釈の間違いを証明している。)そして学問的裏づけなく個人見解のみを用いてクルアーンを解釈することを戒めている。

この問答から、一般のムスリムと知識人層のムスリムの間でのクルアーンに対する関わり方の相違が見て取れる。前者は現実の重大な問題についてクルアーンを用いて分かりやすく納得することを求めるが、後者はそのような安易な態度は認めず、必要な学問的プロセスを経てクルアーンを解釈することを主張する。イスラームにおいてはクルアーンの文言を自分の主張を正当化するために解釈することは強く批判され、ハディースなどを用いた解釈を行うことが伝統的に良いとされる傾向がある。前者は「個人見解によるクルアーン解釈」、後者は「伝承によるクルアーン解釈」と呼ばれるが、この議論も前者を否定し後者を薦めるといった伝統的な解釈学の見解に従ったものとなっている。

4) モノとしての扱い方

このテーマはムスリムの清浄概念と関わるものである。クルアーンの書物つまりムスハフを持つ者が「清浄」でなくてはならないという基本的な問題に関しては、次のような質問がなされている⁽⁵²⁾。この質問者は、清めを行うことなくクルアーンを持ったり読誦したりすることがハラーム *ḥarām*〔禁忌〕なのかどうかと尋ねている。ムナジッドによるファトワーでは、まずイブン・バーズが同内容の質問に答えたファトワーが引用されている。それによればシャリーア上、ウドゥー *wudū'*〔身体の部分的な清め〕を行うことなくムスハフに触れることは認められていないが、暗誦するだけならば構わないと述べている。これは大小便・失神・性器との接触・放屁といった日常的な小汚を念頭においた発言である。だがイブン・

バーズによれば、ジャーバ *janāba* (大汚) の場合は、グスル *ghusl* (全身的な清め) を行わない限り、暗誦も認められないとしている。ここでは性交・射精・月経・出産・不信仰・入信時・死体の清めといった大汚が念頭に置かれている。このようにモノとしてのクルアーン、つまりムスハフの扱いは、完全に清浄な状態であることが必要であり、暗誦する場合よりも厳格にとらえられている。

主な質問内容は、ムスハフの生理中の扱い方や、非ムスリムに渡すことや浴室(トイレ)に持つことの入ることの是非、落とした場合の対応、捨てる際の方法、キスの是非などとなっている。

このなかで特に目に付くのは非ムスリムとの関係のなかで質問が生じているケースが多いことであろう。この非ムスリムとの問題は生理中の問題と同様にムスハフを持つ者の側に関するものである。法学的に生理は小汚、不信仰の状態にある非ムスリムは大汚となり、清めの行為をしなければムスハフを持つことはできない。

非ムスリムにムスハフを手渡す必要が生じるのは、イスラームを知ってもらう、もしくは宣教(ダアワ *da'wa*) する場合である。この目的のため、例えばカナダ在住者はクルアーンの英訳書を公共図書館に寄贈することの是非を問うている⁽⁵³⁾。ただしここで懸念されているのは、書物がぞんざいに扱われることである。エジプト在住者も非ムスリムにムスハフを渡し、それを読んで理解してもらおうと考えているが、不信仰者によって傷つけられることを恐れている⁽⁵⁴⁾。また非ムスリムが手に取る時にはムスリム同様に清めをすべきなのかという質問もある⁽⁵⁵⁾。これらを見ると、法学の規定とは異なり、非ムスリムであることそのものが不浄だとみなされているわけではないようである。

さてこれらの問いに対するファトワーであるが、翻訳書はクルアーンそのものではないため、ダアワを目的として非ムスリムに渡すことは推奨されている。しかしアラビア語のクルアーンつまりムスハフに関しては、次のサノ・クトゥブ・ムスタファーのファトワーにおいてよく言い表されている。

る。「不信仰者に与えるのは、彼または彼女がそこから益を得るといふ希望がない限り、やめておいた方がよい。つまり、彼または彼女がイスラームに改宗するならば、そうすることに問題はない。これは、必要であれば非合法行為も合法となる、という法的格言に基づく」⁽⁵⁶⁾。

その他の浴室に持ち込むことや落とした場合に關する質問は、ムスハフそのものが汚れることを心配してのものである。キスすることに関しては、これはビデオではないのかという質問が IO と IQA の双方で見られる⁽⁵⁷⁾。どちらもファトワーは、シャリーアには明確な規定がないため、義務でもなければ禁止されてもいないとしている。ここでも、広く行われている行為であるにもかかわらず、判断の不明瞭な場合はビデオであることが懸念される傾向がうかがえる。

5) 学問的関心

ここに含まれるのは、クルアーンの成立史や解釈学、文体・構成に關してといった学問的関心に基づく質問である。これらの多くは「クルアーン学（ウルーム・アル＝クルアーン）」に含まれる知的関心の高いものとなっている。

クルアーンの成立に關しては「誰がクルアーンを書きとめ、まとめたのか？」⁽⁵⁸⁾、「どうやってクルアーンは今の順序で収集されたのか？」⁽⁵⁹⁾という根本的な質問や、各章の題がどのようにして付けられたのかについての問いが見られる。後者のような疑問が出ることはある意味自然である。なぜならば各章の題はその章全体のテーマに即したのではなく、章内の記憶に残りやすい言葉が選ばれることが多いためである。前者は極めて本質的な問題であり、非ムスリムによる研究のなかにはムスリムの伝統的な見解を真向から否定するものも存在する⁽⁶⁰⁾。これらの質問の文面からは、外部からのクルアーン成立に対する疑念の影響を受けたという証拠は見られないが、次の「(6) 信憑性に対する疑問」ではそれが大きな影響を与えていることが明らかになるだろう。

次にクルアーンの解釈学に關連する問いも見られる。イブン・カシールとタバリー al-Ṭabarī

(839-923) の解釈書⁽⁶¹⁾ のどちらがより優れているのかという質問⁽⁶²⁾ は、現在もなお古典期の最も重要な解釈者の文献が参照され続けていることを示している。特にタバリーの著作は最初にクルアーン全体を解釈した本格的な解釈書とされ、クルアーン解釈史において極めて重要なものである。ファトワーでは両書の重要性を指摘した後で、タバリーがより優れているが、一般人には難しいので、イブン・カシールのもを薦めるとされている。

また古典期と近現代におけるクルアーン解釈の違いに關する質問⁽⁶³⁾ や、現代の科学理論を用いてクルアーンを解釈することの是非を問うもの⁽⁶⁴⁾ も見られる。これらはクルアーンという聖典を解釈することが時代によって変遷するものであると認識し、現代における解釈を相対化してとらえようとした、抽象的思考の結果による質問であり、質問者の知的関心の高さを示すと言えよう。特に後者は西洋的学問の象徴とも言える科学とクルアーンが矛盾しないのかどうかという問題意識に基づくもので、これは近現代のムスリムの間では1つのクルアーン解釈学上の論点となってきた⁽⁶⁵⁾。西洋的価値観と対峙することで生じた1つの解釈学の潮流であり、質問者もこの流れに属する疑問を持ったのである。

これらに対して文体や構成に關する疑問は、簡素なものが多い。例えばクルアーンの章の冒頭でしばしば見られるいわゆる「省略文字」についての質問がある⁽⁶⁶⁾。これはアラビア語では「区切られた文字 al-ḥurūf al-muqaṭṭa'」と呼ばれ、2章1節「ALM」のように、章冒頭にただ並べられているアルファベットのことである。

IQA ではムナッジドのファトワーにおいて、正統カリフやムハンマドの同時代者（サハーバ ṣaḥāba）、さらにその次世代者（タービウン tābi'ūn）といったイスラームの初期の世代の人々は、この問題に關して解釈することを避けており、ムハンマド自身も解釈したと伝えられていないため、これを解釈しない方がよいだろう、とされている。続いてこの文字がクルアーンの奇跡性を示すためのものだという解釈が、イスラームの純化

を唱えたハンバル派法学者（ワッハーブ派もこれに属す）のイブン・タイミーヤ Ibn Taymiya (1258-1326) のものとして言及されている。しかし、全体としては解釈を曖昧なままにしておくことを推奨する内容となっている。

他方 IQA では第一代正統カリフのアブー・バクル (Abū Bakr, 在 632-34 年) から始まり、著名な文法学者で重要なクルアーン解釈書⁽⁶⁷⁾ も著したザマフシャリー al-Zamakhsharī (1075-1144) によるクルアーンの奇跡性を主張する解釈など、数多くの古典期の解釈が列挙されている。そしてムフティーのアブドゥル・ファッターフ・アシュールの言葉として、最も正しい見解はクルアーンの奇跡性を示しているというものだという見解が示されている。よって全体の文脈からは、歴史的に見解が分かれているが、恐らくクルアーンの奇跡性を示しているのであろう、という結論が読み取れる。

この違いは、本稿の 2 の 1) で言及した IO と IQA のファトワーにおける傾向の相違の一例だと言える。つまりハンバル法学派に属すワッハーブ運動の末に生じたサウジアラビアの学者ムナッジドが運営する IQA は厳格で保守的な内容となりがちであり、前述のファトワーは人間の恣意的な個人的見解をクルアーンに付することを避けようとするイスラームの伝統的な姿勢の現れである。他方、現実的なカラダーウィーを擁する IO のファトワーではある程度の結論を示そうとする努力がなされている。

6) 信憑性に対する疑問

この問題に関しては 4) と並んで、非ムスリムから尋ねられることがファトワーを求める契機となる場合が多く見られる。例えばデンマーク在住者は非ムスリムの友人に、クルアーン 11 章 2 節はムハンマドがクルアーンを書いたという証拠だといわれ、「本当にムハンマド（彼に平安あれ）がクルアーンを書いたのでしょうか？」と尋ねている⁽⁶⁸⁾。類似の質問としては、ムハンマド死後にクルアーンがまとめられたというイスラームの公式見解に関するものが見られる⁽⁶⁹⁾。これは質問者

がキリスト教徒のクラスメートから、クルアーンがムハンマドの生前に書かれていないなら、どうしてそれが本当の神の言葉だと信じることができるのかと詰問されたためである。

このような直接的な質問のほか、ウェブサイトや雑誌などでクルアーンの信憑性を疑う内容を目にしたことから迷いが生じた例も見られる。例えば、ある質問者は反イスラーム主義のイギリス人キリスト教神学者が運営するウェブサイトにおいて、クルアーンの文言が変えられているという記述を見つけ、この真偽を知りたがっている⁽⁷⁰⁾。このように信憑性の問題を感じている質問者たちの多くは、外部からの問いかけを契機としている。

クルアーンの信憑性の疑われ方であるが、大きくは 2 つに分けられる。1 つはそれが本当にアッラーの言葉なのかどうか、もう 1 つは啓示された言葉が現在に至るまで正しく伝えられているのかどうか、というものである。前者は 5) で見られた成立に関する問題とも関係し、前述したムハンマドが書いたのかどうかという問題や、クルアーンはそれ以前の聖典を書き写しただけではないのかという非ムスリムの言説に対する疑問が生じている⁽⁷¹⁾。後者としては、クルアーンの文言が変えられているのではないかと⁽⁷²⁾、クルアーンの一部がなくなっているのではないかと⁽⁷³⁾、という質問が見られる。これらは全て、外部の言説に端を発した疑問となっている。

言うまでもなく、これらに対するファトワーは総じてクルアーンの信憑性、これがアッラーの言葉を一字一句違えることなく伝えられたものであることを、論議を尽くして主張している。例えば、アッラーがそのように約束しているということ、クルアーンは世代から世代へと多くの人々によって伝えられてきたこと、などがその根拠として挙げられる。またアルバニア在住者はクルアーンの正しい伝達の危機が、現在起こっているかもしれないと懸念している⁽⁷⁴⁾。彼はクルアーンの偽バージョンがどうやらイラクから出回っていると聞いたが本当か、と尋ねている。これに対してアフマド・クッティーは、アッラーはクルアーンを最後の日まで正しく伝えるよう守ると約束しており、

偽バージョンが受け入れられることはない、もし全ての印刷本が地上から消えたとしても、全世界の何百万もの人々がクルアーンを暗誦しているから問題はないと答えている。このように穆斯林にとってはクルアーンの信憑性は公的な教義においては疑問の余地はないものであるが、実際には外部からの疑念や風聞に接することで確信がゆらぐ場合が少なくないことが見て取れる。

4. おわりに

当然ではあるが、ある事柄に疑問を持つということはそれに関心がある証拠である。ファトワーを求める者たちは質問している事柄に関心を持っているが、無関心な者たちはそもそも尋ねることもしない。つまり本稿で取りあげた問答は、クルアーンに関心のある穆斯林たちの聖典観を表しているが、この聖典に関心のない穆斯林たちの意識をつかむことはできていない。このような限界に加え、すでに述べたようにインターネットを利用する人々に限定されてはいるが、本稿を通して「穆斯林にとって聖典クルアーンはどのような存在なのか」、「どのように聖典と接しているのか」という問いに対する答えをある程度導き出すことができたと考えている。

本稿が対象とした質問者たちのなかには、外部からの批判や疑念を受けて迷いが生じた者もいたが、決定的にクルアーンが聖典であることを否定している者はいなかった。イスラーム系ウェブサイトにあえて質問をする者たちは、聖典としてのクルアーンに関心があるということであろう。では彼/彼女たちにとってクルアーンはどのような聖典なのか、つまりその理想像はどのようなものであるのか、そして現実はどの程度乖離しているのか？

Muslimの極めて理想的なクルアーンとの関わり方は以下のようなものであろう。読誦する時は、アラビア語で正しい発音で暗誦する。その時、自らを清浄な状態にし、清浄な場所にいる。ムスハフは丁寧に扱い、それができない者には渡さない。読誦を聞く時も清浄な場所で真面目な態度で集中

して聞く。その意味内容を正確に理解する。さらにその聖典としての信憑性を批判されても動じずに反論する――。

しかし実際は理想からは遠いところにいる者が少なくないようである。アラビア語はよく分からず、正しい発音もできず、さらに暗記する余裕はない。ムスハフを清浄ではない場所に持って行くこともあるし、丁寧に扱わない者に渡す必要が生じる時もある。他のことをしながら読誦を聞く。意味内容がよく分からない。聖典としての信憑性を問い詰められた時に反論できない――。質問者たちは自分たちの行為や認識が誤っているのではないかとの危惧からファトワーを求める。つまり、正しい方法があるはずだという認識は持っているのである。だが周囲からそれを知ることは難しいため、わざわざウェブサイト上のムフティーに質問をしている。

これはMuslimが身近な共同体のなかで模範となり信頼できる回答を得ることができなくなっていることを意味していると考えられる。これは、非Muslim国に住む場合であっても、そうでなくても、生じている現象のようである。社会が急速に変化しているため、それに応じた回答を与えてくれる権威者は身近にはおらず、そこでテレビやインターネットという新しいメディアで活躍する宗教知識人を頼りにすることになったのであろう。

いずれにせよ、質問者は理想的な状態でクルアーンと接することを欲している。ゆえに質問しているのである。その背後にある意識は「ビドア」と「報酬」という概念で説明できるのではないかと考えられる。ここで言うビドアは、スンナからの逸脱という罪とそれへの罰を指し示す。よってクルアーンと接する際にMuslimの念頭にあるのは、罰を避けて報酬を得ること、さらに言えば、地獄に行かず天国に行くことではないか。もちろん全ての者たちが常にこのようなことを明確に念頭において行動しているとは言えないが、最終的な価値判断はここにあると考えられるのである。Muslimにとって現世とは、善行を積み重ねて天国に行くまでの過程に過ぎないことをふまえるならば、これを功利的という言葉で片付けることはで

きないだろう。

最後に、エジプト在住者からの質問とそれへのファトワーを紹介したい⁽⁷⁵⁾。

「今日ムスリムが受けている苦難の根本的原因は、クルアーンに対する無関心だと私は確信しています。この深刻な問題に関して、ムスリムがクルアーンに対してどのような義務を果たすべきなのかにふれつつお答えください」。

これに対する回答はパキスタンの著名な学者イスラール・アフマド Israr Ahmad (1932-) の言葉の引用が中心となっている。

「世界中のムスリムのウンマ〔共同体〕における痛ましく悲惨な状況は、ムスリムによるクルアーンの放棄に起因する。アッラーの最後の啓示に対して我々が取っている無関心の態度はそれを嘲笑しているのと同じである。そうではなく、我々のクルアーンへの責任をはっきりと理解し、それを満たすために最善の努力をなさねばならない。我々がクルアーンに対して負っている義務の全てを実行せずに世界の情勢が改善されることは期待できず、また来世における救いも望めないのである。」

これに続いてその義務が具体的に示される。それは、クルアーンを信じること、読むこと、理解すること、その教えに基づいて行動すること、他の人にその教えを伝えること、という5つの事柄であるという。

現在、過激な武装闘争を行うムスリム勢力のなかにはイスラームの外に現実問題の原因を求める傾向が強く見られる。しかし他方で、この問答のような自省的な思索も行われているのである。そしてその核にクルアーンという聖典が存在していることが重要だと考えられる。つまりクルアーンは、外部への怒りの放出を支持する存在としてではなく、外部を改善するために内面の再考をうながす存在となり得ているのである。

註

(1) 本稿におけるアラビア語用語の表記に関しては、基本的には『岩波イスラーム辞典』に従ったが、適宜一般的に用いられている呼称も()内に表記しておいた。特に欧米在住ムスリムの人名など

は、実際の発音とアラビア語などの原音での発音が一致しない場合もあり、その際は慣行に従った。また引用文中に挿入されている〔 〕は筆者による。

- (2) 言うまでもなく、ここでの「ジハード」は元来の意味である「奮闘努力」という意味よりも狭く、一般的に用いられている「聖戦」「異教徒への武力闘争」という意味である。「ジハード」の意味の多様性・時代による変遷に関しては、Bonney 2004を参照のこと。
- (3) ワーナー・ブラザーズ(アメリカ)、2005年製作。
- (4) ただしこの映画では、この「若者自爆テロリスト」を悪役としては描かず、そうせざるを得なかった背景として、アメリカの石油資本による富の収奪を設定している。
- (5) 「若者」の定義はそれほど厳密に捉えているわけではない。ここでは大雑把に、インターネットにアクセスすることが日常となっているであろう10から30歳代の人たちのことを指す。後述するように、本稿で扱うウェブサイトにはこの年代の人たちのアクセスが多いと推測される。
- (6) 1989年に起きたサルマン・ラシュディー Salman Rushdie (1947-) の『悪魔の詩』(1988年刊行)事件において、イランの最高指導者であったホメイニー師(1902-89)によって死刑宣告がファトワーとして出された(例えば、ベンスラマ(1994):101を参照のこと)。このようなケースは極めて例外的なものであり、基本的にファトワーは日常生活の相談のためのものである。よってファトワーを求める行為を「よろず相談」「人生相談」と呼ぶ研究者もいる。ファトワーに関しては、例えば次の論考を参考のこと。小杉1987; 2002, 西野(編訳)2006, 嶺崎2003a; 2003b, Skovgaard-Petersen 1997。
- (7) アラブ諸国では閲覧することで拘束されることもあるという。(朝日新聞2006年9月30日)
- (8) <http://www.islamonline.net/English/index.shtml> (本稿で引用されるウェブサイトには2006年5月8日より2006年11月5日の間にアクセスした。)
- (9) <http://www.islam-qa.com/index.php?ln=eng>
- (10) さらに Fatwa Online (<http://www.fatwa-online.com/>) を含め、これら3つをスンナ派の代表的なファトワーを出すウェブサイトとすることもあるが [Bunt 2003:142-47], ここには過去に出されたファトワーの蓄積が少ないため、本稿では取りあげない。
- (11) <http://www.islam-qa.com/index.php?pg=about&ln=eng>
- (12) ジャジーラ・テレビに関しては Ahmed 2006を参照のこと。
- (13) <http://www.islamonline.net/english/>

- aboutus.shtml
- (14) サイト・マップは <http://www.islamonline.net/English/SiteMap.shtml> にある。
- (15) <http://www.islam-qa.com/index.php?pg=about&ln=eng>
- (16) http://www.islam-qa.com/words/munajed/munajid_eng.html
- (17) イブン・パーズは常にサウード王家の政策を宗教的権威でもって正当化する行動をとったため、その保守頑迷な思想に反して、王家の意向に沿って湾岸戦争を契機に米軍の国内駐留を認めるファトワを出した。これはウサーマ・イブン・ラディン Usāma ibn Lādin (ビンラディンとも、1957-) が繰り返し強く非難しているものである [ローレンス 2006 : 40]。
- (18) Zaman 2002 : 152-60 や al-Yassini 1985 に詳しい。
- (19) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?cid=1118742803189&pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar%2FCollection%2FFatwaCounselorsE
- (20) 例えば、質問者は自らを「占領された祖国から敵を追い払いたい若者の 1 人」と説明しているが、このパレスチナ系の人物は、行動を起こす前に当局に拘束されるであろうことを懸念している。
http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503544682
- (21) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=654&ln=eng>
- (22) 例えばカナダ在住・26 歳 (女性・独身・医者) が結婚の悩みに関して質問している。
http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503547900
- (23) 例えば、内藤 1996 ; 2004 や Haddad 1991, Kepel 1997, Phillips 2006 などを参照のこと。
- (24) 「形態と概念としての聖典は近東において徐々に生じて発達し、その強化の過程を経て、クルアーンの誕生とともに事実上完全な段階に達した」、
「クルアーンは、書かれた聖なる書物……という聖書的伝統を継続したものとしてのみではなく、長きにわたってイラン人 (やヒンドゥー教徒) を特徴付けてきた、より際だった口承/聴覚的伝統を継続したものとしてもとらえることができる」。
[Smith 1993 : 47, 49]
- (25) クルアーン学に関しては例えば Qadhi 1999 や Denffer 1994 に詳しい。
- (26) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503547926
- (27) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=65572&ln=eng>
- (28) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=72591&ln=eng>
- (29) この記録とは、生前の行いが、天国行きか地獄行きかを判断するための「記録の書」に書きとめられることを意味している [大川 2004 : 146-62]。
- (30) ブハーリーとムスリムの両『サヒーフ』には伝えられていないが、両者の「真正 (サヒーフ ṣāḥih)」の基準を満たしているとされている。この両『サヒーフ』は、ブハーリー 2001 とムスリム 1987 という日本語訳がある。
- (31) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=3465&ln=eng>, <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=32594&ln=eng>
- (32) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503544548
- (33) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=20803&ln=eng>
- (34) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=82219&ln=eng>
- (35) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503545360
- (36) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=78370&ln=eng>,
<http://www.islam-qa.com/index.php?ref=2297&ln=eng>,
http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503545344
- (37) 筆者の見聞からも、実際に車を運転しながらカセットテープやラジオからクルアーンを聞く人は少なくない。
- (38) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503548434
- (39) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503545072
- (40) 最終句である 83 節に「その手で全てを制御する、彼 [アッラー] に讃えあれ。汝はその御許に帰る」とある。最後の「帰る」が復活の日や来世を示唆している。
- (41) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=22366&ln=eng>, 56 章を毎晩唱えれば絶対に貧しくはならないというハディースの信憑性も否定されている。
http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=

- 1119503545594
- (42) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503546354
- (43) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503544338
- (44) アッラー、天使、啓典、使徒、終末の日、天命（予定）を信じること、信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼を行うこと。ただシクッティーは「五柱」（「五行」）と述べながらも「信仰告白」には言及していない。
- (45) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1147764055771
- (46) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=50120n=eng>
- (47) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=13686&ln=eng>
- (48) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503544734
- (49) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503544884
- (50) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503545888
- (51) 竹下 2006 : 98-99 を参照されたい。
- (52) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=10672&ln=eng>
- (53) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503546508
- (54) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503544660
- (55) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=12225&ln=eng>
- (56) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503544660
- (57) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503544452,
<http://www.islam-qa.com/index.php?ref=9320&ln=eng>
- (58) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=10012&ln=eng>
- (59) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503544002
- (60) 例えば Wansbrough 1977。
- (61) イブン・カスィールのは *Tafsir al-Qur'an al-'Azim*, タバリーのは *Jāmi' al-Bayān fī Ta'wīl al-Qur'an* である。
- (62) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=43778&ln=eng>
- (63) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=8399&ln=eng>
- (64) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=22351&ln=eng>
- (65) Bucaille 2003 や Baljon 1968 : 88-98, 竹下政孝 2006 : 97-98 を参照のこと。
- (66) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=21811&ln=eng>,
http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503544324
- (67) 書名は, *al-Kashshāf 'an Ḥaqā'iq al-Tanzīl wa 'Uyūn al-Aqāwīl fī Wujūh al-Ta'wīl*.
- (68) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503545720
- (69) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503548808
- (70) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=23487&ln=eng>
- (71) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503544822
- (72) <http://www.islam-qa.com/index.php?ref=23487&ln=eng>,
<http://www.islam-qa.com/index.php?ref=2428&ln=eng>,
http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503545420,
http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503545420

- 1138109424405
 (73) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503544620
 (74) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1138109424405
 (75) http://www.islamonline.net/servlet/Satellite?pagename=IslamOnline-English-Ask_Scholar/FatwaE/FatwaE&cid=1119503545874

主要参考文献・ウェブ資料

- IslamOnline <http://www.islamonline.net/English/index.shtml>
 IslamQ&A <http://www.islam-qa.com/index.php?ln=eng>
 (井筒俊彦訳) 1964『コーラン』(全3巻改訂版) 岩波文庫
 (藤本勝次・池田修・伴康哉訳) 2002『コーラン』(全2巻) 中公クラシックス
- 大川玲子 1997「イスティアーズの祈禱句に見られるクルアーンの受容に関して」『オリエンツ』40(1): 90-105
 大川玲子 2004『聖典「クルアーン」の思想 イスラームの世界観』講談社現代新書
 クック, マイケル(大川玲子訳) 2005『コーラン』岩波書店
 ケベル, ジル(丸岡高弘訳) 2006『ジハード イスラーム主義の発展と衰退』産業図書
 小杉泰 1987「現代イスラームにおける宗教勢力と政治的対立」片倉もとこ編『人々のイスラーム その学際的研究』日本放送出版協会: 27-86
 小杉泰 2002「イスラーム人生相談所」大塚和夫編『現代アラブ・ムスリム世界 地中海とサハラのはざままで』世界思想社: 13-45
 小杉泰 2006『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会
 竹下政孝 2006「ムハンマドの奇跡とコーラン」『中東協力センターニュース』31(3): 95-99
 内藤正典 1996『アッラーのヨーロッパ 移民とイスラーム復興』東京大学出版会
 内藤正典 2004『ヨーロッパとイスラーム 共生は可能か』岩波新書
 西野正巳(編訳) 2006『イスラーム世界の人生相談』太陽出版
 バスブース, アントワヌ(山本知子訳) 2004『サウジアラビア 中東の鍵を握る王国』集英社新書
 プハーリー(牧野信也訳) 2001『ハディース イスラーム伝承集成』(全6巻) 中央公論新社(中公文庫)
 ベンスラマ, フェティ(西谷修訳・解説) 1994『物騒なフィクション』筑摩書房
 堀井聡江 2004『イスラーム法通史』山川出版社
 嶺崎寛子 2003a「多元的法秩序としてのシャリーアとファトワー 現代エジプトを事例として」『日本中東学会報』18(1): 1-31
 嶺崎寛子 2003b「現代エジプトのファトワーにみるジェンダー意識と法文化: 婚姻と姦通を中心に」『国立女性教育会館研究紀要』7: 69-81
 ムスリム(磯崎定基・飯森嘉助・小笠原良治訳) 1987『日訳 サヒーフ ムスリム』(全3巻) 日本サウディアラビア協会
 ローレンス, ブルース(鈴木主税・中島由華訳) 2006『オサマ・ビン・ラディン発言』河出書房新社
 Ahmed, Sameera 2006 "Arab Public Opinion in the Age of Satellite Television: the Case of al-Jazeera", Elizabeth Pool and John E. Richardson (ed.), *Muslim and the News Media*, London & New York: I. B. Tauris: 177-187
 Baljon, J. M. S. 1968 *Modern Muslim Koran Interpretation (1880-1960)*, Leiden: E. J. Brill
 Bonney, Richard 2004 *Jihād: From Qur'ān to bin Laden*, NY: Palgrave Macmillan
 Bucaille, Maurice (Alistair D. Pannell trans.) 2003 *The Bible, the Qur'an and Science: The Holy Scriptures Examined in the Light of Modern Knowledge*, New York: Tahrike Tarsile Quran
 Bunt, Gary R. 2000 *Virtually Islamic: Computer-mediated Communication and Cyber Islamic Environments*, Cardiff: Univ. of Wales Press
 Bunt, Gary R. 2003 *Islam in the Digital Age: E-Jihad, Online Fatwas and Cyber Islamic Environments*, London: Pluto Press
 Denffer, Ahmad von 1994 *'Ulūm al-Qur'ān: An Introduction to the Sciences of the Qur'ān* (rev. ed.), Leicester: Islamic Foundation
 Haddad, Yvonne Yazbeck (ed.) 1991 *The Muslims of America*, New York: Oxford University Press, 1991
 Kepel, Gilles (Susan Milner trans.) 1997 *Allah in the West: Islamic Movements in America and Europe*, Cambridge: Polity Press
 Phillips, Melanie 2006 *Londonistan*, New York: Encounter Books
 Qadhi, Abu Ammaar Yasir 1999 *An Introduction to the Sciences of the Qur'aan*, Al Hidaayah Publishers & Distributors (UK) Publishing
 Skovgaard-Petersen, Jakob 1997 *Defining Islam for the Egyptian State: Muftis and Fatwas of the Dār al-Iftā*, Leiden, New York & Köln: Brill
 Smith, Wilfred C. 1993 *What is Scripture?: A Comparative Approach*, Minneapolis: Fortress Press
 Taji-Farouki (ed.) 2004 *Modern Muslim Intellectual*

- als and the Qur'an*, London; New York: Oxford University Press in association with the Institute of Ismaili Studies, London
- Wakin, Daniel J. 2002 "Online in Cairo, with News, Views and 'Fatwa Corner'", *New York Times* (October 29, 2002),
<http://www.newyorktimes.com>
- Wansbrough, John 1977 *Quranic Studies: Sources and Methods of Scriptural Interpretation*, Oxford: Oxford University Press
- al-Yassini, Ayman 1985 *Religion and State in the Kingdom of Saudi Arabia*, Boulder: Westview Press
- Zaman, Muhammad Qasim 2002 *The Ulama in Contemporary Islam: Custodians of Change*, Princeton & Oxford: Princeton UP